

ゆたかなる春の恵もくれなゐの深き色香の花に見ゆらめ
國津風をさまる春の色もげに香にあらはるゝ梅のはつ花
一、月前餞別

三月七日夕過、康征之亭月照庭際、戯に餞別の意を。

限ありて春に別るゝ花も根に歸るをたのむ今日の暮かな
聊思ふよしありて也。且亭主人筒花生に花は不生して、
此句をつけられたるまゝ、其裏に書付し也。

我も世に生る甲斐あり花の友

一、久丸公子誕生の賀

五月公子久丸誕生の賀。

今日よりはなほ喜びを加ふなる國の榮えも一しほにして
つきせじな國とみ民もやすくして君をぞあふぐ萬代の聲

一、公儀役人黜陟常なき事

此頃山内大膳亮殿を、若年寄役被命候の處、五月十一日御
役被召放候。其間只八日なり。又去年か御奏者番三浦壹岐
殿、若年寄役に被命候處、是も近頃御役被召上本職被仰付
候。喜多見若狹守殿は無雙の出頭、最前七百石の祿に候處、
二萬石迄御加増にて、牧野備前守殿扱は喜多見殿と申程に

候處、當春御勘氣果て松平越中守殿へ永御預け成、勢州桑
名城下へ被遣候。是等に不限御側御奉公の衆、無幾程御役
被召放候儀度々に及候。當時御役人衆安堵無之旨風聞す。
最前御書院番頭松平但馬守殿、去冬御側衆に被命安房守と
改稱候。昨十一日四千石御加秩にて一萬石に成り、若年寄役
被仰付候。是も又如何と申様に候。稻垣安藝守殿・齋藤飛騨
守殿も、當春御役被召放候。か様の度々に、各親類中迄も
出仕等遠慮被仰付候事。飛騨高山城主金森出雲守頼時も、
去頃奥御談衆に被命、五月十三日猶更御近習の御奉公被仰
付、柳澤出羽守並と申事也。十五日戸田城州へ御使者被遣
候刻、御返答の内に雲守殿の儀は御並違申候條、御勤の
儀御無用に候。若又公儀向押立候儀にて、御勤可有之品候
はゞ、山城守殿迄御伺可有之旨被仰越候。

一、宗近作の脇差

十八日堀部養叔、小鍛冶宗近作脇指獻上す。是は元來從太
閤秀吉公、備前上様へ被進候處、備前上様御田秀家
御殿中被召使候
内官の朝鮮人左京と云者へ被下候を、左京儀養叔弟養佐を
養子の約束いたし、件の脇指を授申候。當時養佐子養壽爲

家珍候。内々多賀信濃に附て獻之。

一、傳太の太刀と小鍛冶の長刀

傳太の御太刀、節姫様へ爲御守御側に被指置候の處、久丸
様爲御守護金澤へ可被遣旨、十九日右御太刀と小鍛冶御脇
指と被取替。且又小鍛冶の御長刀、豐姫様・慶姫様御守護
に、金谷の御亭に被指置候。是又久丸様御守に被遣候に付、
替の御道具の事今日本阿彌光山へ御尋候處、三池可然旨申
上候。三池の御道具猶三腰御土藏に有之由。傳太の御太刀、
小鍛冶の御長刀を本阿彌拭候時分は、潔齋仕候由也。如此
の類猶有之や御尋の處に、公方より本阿彌家へ代々御預の
鬼丸の御太刀、又は禁裏に號壺切御劔有之候。是等拭候時
分も潔齋仕候。已上四振の外は無御座候由。

一、山崎半左衛門、伊達家に使す

六月初日松平陸奥守殿より、初て御使者家老柴田内藏允被
遣候。口狀は、今朝は於御城得御意珍重存候。伊達遠江守
へも被入御念、被仰聞候趣致承知候。内々丹後守へも申聞
置候。御序も有之候はゞ、得御意度存たる處に御座候。尤
致伺公御禮可申入候得共、御普請御用に付不能其儀候。依

之先づ以使申上候との趣なり。御普請とは日光御普請御手

傳也。不破彦三取次、御返答も彦三申達候。右爲御返禮山
崎半左衛門被遣候處、御留守居役淺井彦五郎罷出令誘引、
廣間と可申處にて彦五郎相伴にて料理出、彦五郎同役兩人
罷出及挨拶、盃など仕り、其儀畢て若年寄大町備前と申者罷
出、追付陸奥守殿可有御逢の由申聞候。致誘引罷通り候へ
ば、備前取次にて前へ罷出候。其披露は松平加賀守様御使
者山崎半左衛門殿と申候。陸奥守殿近く寄候様に被仰、半
左衛門猶豫仕候處、起座被成候故、半左衛門も進寄候處、
三四尺計り御近寄御口上をと被仰。則申述候處、被入御念
早々御手前を被下忝との挨拶有之、其上に御返答被仰聞
候。半左衛門退出の處、送りに起座被成候。將又御返答の
上に、御先祖以來代々別て得御意、其上書記候物なども有
之、公儀へも被上候。左様の段丹後守殿へも被仰入候。内
々被得御意度候處、御本望の旨被仰聞候。馳走の様子等委
細御尋にて申上様。右書記し候物とは高德公御書の由也。

一、久丸公子の計音を聞きて

六月二日久丸様御天死の儀、御計音を聞きて。